

思い出 多々

藤田 早苗

2017年10月26日

● マラソン

鬼木君の校内マラソンの思い出を読ませて頂いた。私も毎年走ったが3回とも裸足だったと思う。石ころを踏んでも大丈夫な足になっていた。1年の時は、水道町から子飼橋にかけての短い距離、校舎にたどり着いたら、実力考査の発表がされていて、思いがけず上位の位置にあったのが嬉しく、我が家まで、また走って帰った。二年の時は全校横一列のスタートで、私たちの組が校門までの直線距離が一番短く、先頭集団で校門を通りぬけた。江津湖から田迎を廻っての長距離だったが、途中抜かれ放題でも50番ぐらいでゴールした。最初にエネルギーを使い切っても何とかなつた次第である。三年になって適当に走ることにした。といってもズルはしていない。道中を黄民雄君と並んで走り、足を揃えて一緒にゴールインしようと約束していた。校門に向かって残り100mほどのところで、「黄さん、頑張って一……」の女子生徒の声援が聞こえてきた。とたんに黄君はピッチをあげ、みるみる私を引き離した。声援の主は次学年のかなり目立つ女子生徒である。男の約束は女性の声援でもろくも崩れてしまった。当時を振り返ると兵舎改造の校舎は雨の日は黒板が見えづらく、窓の開閉は不自由で、男子生徒ばかりの風景だった。「青い山脈」の学園生活が羨ましかった。高一になって少数の女生徒が入学し、次学年から多くの女子生徒も入学し本格的な男女共学が始まったが、私たちの学年までは旧制中学の雰囲気を引き継いでいる。このような時での「声援」である。誰だって思わず走り出すに違いない。残念ながら「声援」は私向けではなく黄君だった。

● 野球の練習

その黄君と思わぬところで出会ったことがある。水前寺球場ではなく、甲子園である。まさに偶然である。高二の時だった。その年、熊高は予選の緒戦で済々黉に敗れていた。私は野口先生の助言もあり、これを機に退部したのだが、その済々黉は甲子園に出場しベスト4に残る活躍をしていた。出会ったのはその日の最終の済々黉戦だった。観客も少なくなっていたので、出会い易かったのだろう。それにしてもびっくりした。長兄が大阪にいたので初めての大阪見物である。日米豪の国際水泳大会も開催されて扇町プールにも出かけた。日本がオリンピックに参加が出来ない時期、期待の古橋選手は全盛期を過ぎていた。

その古橋選手が突然、熊高のグラウンドに現れた。大阪見物の前年、野球練習中、正門ではなく運動場の門から二人の大学生が出現、そのまま練習中のグラウンドを横切ってプールへ向かった。安藤キャプテン（安藤昇伍君の令兄）が早速抗議したが、その二人は「ふじやまの飛び魚」こと古橋選手と同僚の橋爪四郎選手だった。そうそうたる水泳での世界の二人である。そのまま通り過ぎて行った。二人は私たちを草野球の延長ぐらいに思ったのだろう。その頃の私はスパイクも履いていない外野の球拾いである。棘のある雑草を踏み、しゃがみこんでいたら、安藤主将から「何ばしよるか！」と怒られた。「棘を抜いとりまーす」の私の返事。今では想像もつかない練習風景である。

● 先生の思い出

卒業後も面倒を頂いた川越先生をはじめ、多くの先生方に指導を願ったが、二三の先生の思い出を記したい。

入学以来、無遅刻無欠席だったが、初めて学校をサボったのは中三のときである。プロ野球の公式戦が初めて熊本にやってきた。セパ分離前の巨人阪急戦である。近所の三年上の先輩の家に、熊中の校章を刻んだランドセルを預け、そのまま二人で水前寺球場へ直行した。親に内緒の行動なのに、なぜ入場料の小遣いを持っていたのだろうか？。当時の観戦料は安かったのだろうか。帰宅したら親にきつく叱られた。「今日はどこへ行ったか！」担任のダゴ石こと村橋先生がサボった生徒の家を家庭訪問されていたのである。私以外にもかなりの生徒がいたらしい。

野口先生の家庭訪問も受けたことがある。高二の終わり、野口先生を含め十数人で日帰りの阿蘇登山に出かけた。下山の途中、温泉に泊まろうと云うことになった。先生はその日のうちに、宿泊者の生徒の家を廻られ、宿泊の件を伝えられた。電話も不自由な時期、授業以外での先生の生徒に対する心づかいに深く感謝するものである。

エノケンこと広永先生は高三の担任だった。解析Ⅱの順列組合せを教わった時、数列を克服したら微積分の理解に役立つと強調された。真に受けて数列の数の配列を見ていると面白くなってしまった。しかし微積の理解云々には至らなかった。微積の授業が始まると、先生は「微分積分」の4文字を黒板に大きく書かれ漢文式に読まれた。「微かに分かって、分かった積り」と。またある時は π の数値を黒板一杯に綿々と書きつづけられ私たちの度肝をぬかれた。黒板の最後の数値は……83279である。「…闇に鳴く」と云う歌詞になっていた。先生は π の数値を歌詞にしてそらんじておられたのだった。何かしら生徒に数学への興味を持たせるコツをお持ちだったようだ。

戦前は恒例だった黒川温泉での林間学校が、高三の夏復活した。二十日間ほどの日程で

四十人ぐらいが参加した。往きは防中駅より広永先生を先頭に、リュックを背に徒歩で外輪山を越え黒川温泉まで行った。後日、地図を眺めたら本当に黒川まで歩いたのか疑問に思える距離である。後日、四江会などで黒川の記憶を話すと意外に参加者にお目にかからない。カメラもなく記念写真さえ無い合宿である。修学旅行も無かった時代の宿泊の記憶は、数人の参加者は覚えていても、誰々がいたかは思い出せない。教室は宿に近い小学校を利用したようだ。毎夜、ナポレオンと称するトランプゲームに興じた。一兵卒から將軍までに昇進していく賭けゲームだが賭け金は毎夜配られる飴玉である。賭けながらもしゃぶっているのが賭金は無くなってしまふ。將軍にはなれないままゲームは終わった。市内に戻ったら猛烈な暑さに閉口した。黒川温泉は涼しかったのである。玄海地震の頃、家族旅行で黒川温泉を通ったが、当時とは様相が一変しており、町を流れる川のたたずまいが昔のままだった。

● 通学路

六年間、同じ道を通ったが履物は下駄である。熊本駅から延びる産業道路（旧軍用道路）は電車を横切ると途絶えてしまい、右斜めに入った狭い道となる。第一高女の寄宿舎前を通り、さらに明午橋通りを横切ると、そこは墓場である。墓石を飛び越え大江校裏を抜けると兵舎跡の熊高に着く。父兄会で母と同道した際、同じ道を行くのだが、墓場を抜ける際、母は念仏を唱えながら墓石を飛び越えていた。

磯海孝君のご一家が卒業間際に大阪へ引越された。野球部補欠仲間の磯海君は、卒業までの暫くの間、我が家に逗留した。巨人ファンばかりの中で磯海君だけは南海ファンである。磯海君のお兄様は南海電車にお勤めだった。登校は二人一緒である。先述の産業道路を往くのが当然だが、私たちは白川沿いの道を往き、大甲橋際を通過して遠回りして登校した。戦災で焼け出された小学校の同級生が第一高女の寄宿舎にいた。お互いの通学方向は逆なので、毎朝すれ違うことになる。すれ違う確率を増やすためわざわざ遠回りをしていたのである。いつの間にか磯海君は私の遠回りの理由に気付いていたらしい。

熊高の思い出は兵舎跡の校舎が主体である。現在の熊高にしても当時のままなのは、利用機会の無かった正門と運動場脇の石垣だ。焼け残った図書館もプールも解体された。残存しているのは各自の記憶である。四江会などで昔話をしていると忘れていた記憶がよみがえってくる。お互いが持っている記憶を重ねることで思い出は深まり拡がるようだ。しかしながら昨今は不帰の友も増えて来た。健康第一で残った人生を過ごしたい。